

ワーカーズ

http://www.workers-net.net/
mail workersnet@workers-net.net

毎月1日発行 1部150円 半年1000円(郵送)
郵便振替 00180-4-169433 (ワーカーズ社)

2019/10/1 599号



今号の内容

- ・企業負担増こそ必要——給付削減・負担増の社会保障改革? ②③
- ・コラムの窓... ③
- ・読書室 佐々木隆治氏著『カール・マルクス—「資本主義」と闘った社会思想家』 ④⑤⑥
- ・何でも紹介 『日韓でいっしょに読みたい韓国史』徐毅植・他 ④⑤⑥
- ・「韓国釜山の博物館めぐり」 ⑥⑦⑧⑨
- ・エイジの沖縄通信・NO66 ⑨⑩⑩
- ・色鉛筆... ⑩

おこる安倍政権を追い詰めよう！ ——増長する安倍政権を幕引きに——

安倍改造内閣が発足した。現時点の自民党党則を前提とすれば、任期を2年残すだけ、最後の内閣になるかもしれない組閣だった。特徴は、初入閣者13人という在庫一掃内閣でもあり、また側近重用が際立つ、お友達内閣”そのものだった。

閣僚にとどまらず、首相を補佐する秘書官や補佐官、それに官房幹部など官邸官僚にも安倍取り巻きの面々を就任させた他、軍事・外交の要となる国家安全保障局長に、警察庁出身の内閣情報官だった安倍側近、北村滋を就任させた。

残り任期があと2年となった今、安倍首相にとつて二股をかけた布陣ともいえる。党役員も含め、安倍首相の”悲願”ともいえるべき憲法改定に最後の望みをつなぐ布陣であり、最後の組閣になるかもしれない中で、側近重用だった。

人事となった。安倍首相が執念を燃やす憲法改定については、旗振り続けてきたにも関わらず、国民世論を改憲に向け、動員することはできずにいる。世論調査でも、改憲の必要性への同意はわずかだ。安倍改憲は風前の灯火、求心力保持、一縷の望みなのだろう。安倍政権を有権者に受け入れさせてきた好調だった経済についても、暗雲がただよっている。安倍政権発足前から続いていた経済の好調は、いま様々な方面から逆風が吹いている。一つはトランプが仕掛けた覇権争いも絡む米中経済戦争であり、もう一つは、あのリーマンショックから10年ほど続いてきた好景気局面の終焉だ。その二つの要因で、10年ぶりの世界的な後退局

面を迎えている。アベノミクスの本質は、企業利益第一主義という大企業でこ入れ政策でもあった。その結果が、富の偏在と格差拡大、すなわち、大企業には膨大な内部留保がたまり続け、労働者大衆には、低賃金と自己責任を押しつけるものでしかなかったことがあつた。老後資金2000万円問題”で暴露された。政権最後の2年間は、安倍首相を

支えた好景気が終わるとともに、政権そのものも終わりを迎えるしかない。側近重用政治も裸の王様同然、安倍一強政治は世論からの遊離を一層深める他はない。私たちとしては、安倍政権の自滅を待っている余裕はない。綻びが広がる事態を前にして、安倍包囲網をさらに縮める必要がある。そのため、安倍政権を支えてきた世論、特に若者の支持を安倍政権から引き離すことにある。それには、安倍政治に取って代わる将来展望とそれを実現するビジョンの提示が不可欠だ。

安倍政権最後の2年間を全うさせることなく、政権包囲網を広げ、草の根から安倍政権を追い詰めていき(廣)

■第4次安倍再改造内閣の顔ぶれ

 副総理 財務一留 麻生 太郎 78 衆①福岡 8	 防衛 河野 太郎 56 衆①神奈川15
 総務 高市 早苗 58 衆①奈良 2	 官房 一留 菅 義偉 70 衆①神奈川 2
 法務 河井 克行 56 衆①広島 3	 復興 田中 和徳 70 衆①神奈川10
 外務 茂木 敏充 63 衆①栃木 5	 国家公安 防災 武田 良太 51 衆①福岡11
 文部科学 萩生田光一 56 衆①東京24	 1億総活躍 衛藤 晟一 71 参①比例(衆②)
 厚生労働 加藤 勝信 63 衆①岡山 5	 科学技術 竹本 直一 78 衆①大阪15
 農林水産 江藤 拓 59 衆①宮崎 2	 経済再生 西村 康徳 56 衆①兵庫 9
 経済産業 菅原 一秀 57 衆①東京 9	 地方創生 北村 誠吾 72 衆①長崎 4
 国土交通 赤羽 一嘉 61 衆①兵庫 2 一公	 五輪 橋本 聖子 54 参①比例
 環境 小泉進次郎 38 衆①神奈川11	 参院総務、閣は留任、名前 の後の数字は年齢、凡数字 は当選回数、地名と数字は 選挙区、公は公明党

企業負担増こそ必要

給付削減・負担増の社会保障改革？

安倍改造内閣が発足した。その改造内閣では、これまで先送りしてきた社会保障改革について、「全世代型社会保障改革」の推進が掲げられて、その社会保障改革、検討課題の中身を見れば、改革とは名ばかりの高齢者の自助努力と負担増を押しつけるものでしかない。

◆「改革」それとも「痛み」

安倍首相は9月11日の改造内閣で、側近の西村康稔前党総裁特別補佐を経済再生担当大臣に任命し、全世代型社会保障改革担当相を兼務させ、検討会の議長代理に据えた。また9月20日には、「検討会議」（議長・安倍首相）の初会合を開催し、社会保障改革に向けた議論をスタートさせている。併せて、年金と介護保険は年末までに中間報告

をだして来年の通常国会に法案を提出、医療については、来年夏までに最終報告をだして法案作りを進める予定だという。

だが、その会議の検討課題になっているのは、年金の受給開始年齢の引き下げ、働いて一定の収入がある高齢者の年金を一部カットする在職老齢年金制度の見直し、介護サービス利用時の1割から2、3割への負担増、75歳以上の医療機関の窓口負担での2割への引き上げなど、多くは当事者の負担増になるものばかりだ。

◆労働者・当事者代表不在

とはいえ、検討会議で「厚生年金のパートへの適用拡大」という労働者の要求を実現する結論を導き出すことは可能なのか。そんなことに疑問を抱かせるのが、検討会議のメンバーの気持ちは尊重すべきだが、嫌が応うにも70歳まで働き続けなければ年金がもらえない、生活できないと、というこのも検討課題になっている。

企業・経営者代表は中西宏明経団連会長、桜田謙悟経済同友会代表幹事、新浪剛史サントリHD社長の3人も選任されている。それに学者や専門家のメンバーも政府の抱え御用学者などばかり。これで果たして労働者の声が反映されるともいうのだろうか。

◆企業負担増へ、発想の転換

労働者の処遇改善の課題が議論される時、必ず持ち出されるのが、中小・零細企業は経営が続けられなくなる……という封じ込めの議論だ。最低賃金の改定時にも常に持ち出される。

親会社と子会社、あるいは発注企業と納入業者という二重・三重構造に切り込んでこなかったのだ。労働者の最低賃金引き上げや厚生年金の企業負担増は、当然、納入価格に反映されなくてはならない。

◆闘って実現を！

社会保障負担について、いまの日本では労使折半という土俵から一歩も出ない議論が繰り返されている。むしろタブーにされているのが実情だ。確かにドイツやアメリカはほぼ労使折半だから単純な話で

全世代型社会保障改革を検討する会議

未来投資会議
総務省
経済財政諮問会議
人生100年時代構想会議
社会保障審議会(厚労省)

安倍首相

はないにしても、その土俵自体、負担割合の見直しや改善は大きな課題なのだ。

仮に、労働者が負担する額の倍の企業負担が実現すれば、将来の老後の生活が格段に改善されるわけだ。欧州の高齢者などが日本の高齢者に比べて将来不安が少ないというのは、そうした社会保障制度に裏付けられているわけだ。

安倍政権のアベノミクスの元で、企業利益は継続的に膨らんでいる。内部留保は18年度で前年より16兆円も増えて463兆円になっており、7年連続で過去最大になりこの間158兆円も積み上がったという。私たち労働者の要求は、当然ともいえるべき正当性を持っている。堂々と要求すべきなのだ。今後の社会保障改革では、こうした企業負担の見直しが欠かせない。

とはいえ、企業負担を増やすそうした社会保障改革は当然のこながら、企業・経営者の大きな抵抗に遭遇する。ただ待っていたのでは、労働者の将来不安は解消されない。先行き不安の解消に向けて、労働者の要求の実現に向けて、大きな闘いを巻き起こす必要がある。

(廣)

逆風か？

での人間関係、命綱である民間借上げ住宅の不安定さや打ち切り、があります。福島に住み続けている人たちからはやっかみや批判、裏切者扱いされるというようなことがあります。

コラムの窓…



9月19日午後、私は「原発賠償ひょうご訴訟」31回口頭弁論を傍聴すべく神戸地裁に向かいました。原告側の準備書面では、東北電力や日本原電は津波対策を行っていたのに東電が故意に対策を怠ったことを指摘しました。また、損害論ではあれこれの出費を積み上げた数字でははかれない、家族や生活やコミュニティの喪失の重大さも指摘されました。

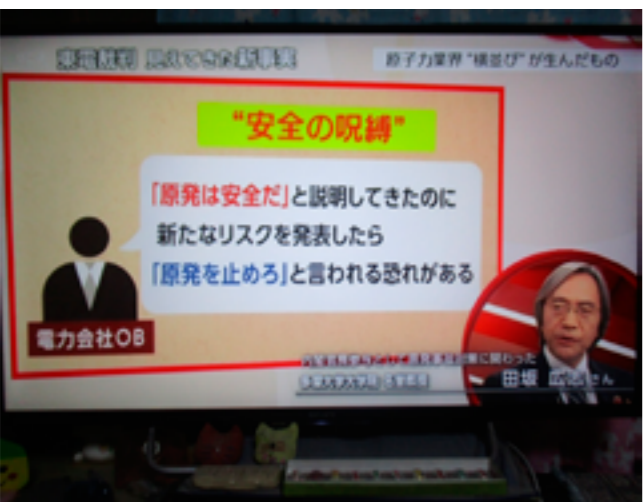
例えば、多様な葛藤・苦しみとして、子育てにおける苦勞、家族分離に伴う孤立感、避難元での人間関係、命綱である民間借上げ住宅の不安定さや打ち切り、があります。福島に住み続けている人たちからはやっかみや批判、裏切者扱いされるというようなことがあります。

敗北、群馬裁判では国側が避難者が福島にいる人々の心情を害している、原告は国土に対する不当な評価をする人たちと主張したということです。

この日、東京地裁では東電刑事裁判の判決があり、すでに被告たちに「無罪」が出たことは明らかになっていました。ところが、報告会で原告の女性が「過呼吸を起こしそうになった」と発言されました。全国で30万所以上、1万人を超える原告が原発賠償を求めなかで、原告側は6勝3敗と頑張っています。

ものでもありません。裁判の過程で、多くの隠されていた事実が明らかになっていきます。検察が持っているけど明らかにしないことが、それらはしばしば再審請求で無罪を明らかにするものだったりするので、不起訴になれば検察のロツカーに仕舞い込まれるものでした。

ここにきて、維新の松井大阪市長が汚染水を大阪湾に流そうなどと言いだしました。これは、2022年夏には処理水タンクが限界という赤信号に手を差し伸べるものであり、邪魔物は捨てて原発延命へと向かうというのでしょうか。これは逆風か、いや反撃の合図でしょうか。



* 次回口頭弁論は
12月5日(火)
午後2時、
神戸地裁大法廷

3

2

カール・マルクス

「資本主義」と闘った社会思想家

佐々木隆治氏著 ちくま新書

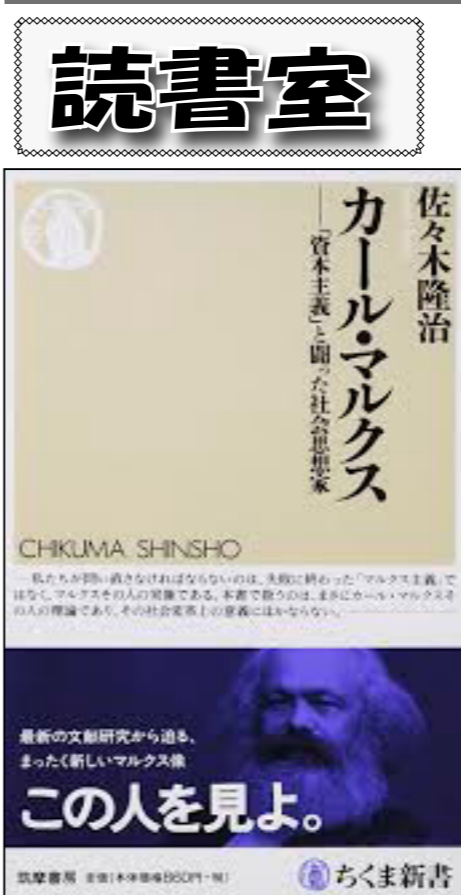
○本書は最新のマルクス文献の研究によって社会思想家・マルクスの実像に迫るもので、その思想の核心を明らかにした。それはこれまでほとんど意識されず、また全くといって良いほど注目されてこなかった、晩期マルクスの物質代謝の思想の復元と紹介である。

世にマルクス入門や資本論入門は氾濫している。その中でこの本を推奨するのは何故か。

それは新MEGA（新マルクス・エンゲルス全集）がドイツで出版されているが、日本では翻訳されていないこともあり、こうした最新文献を踏まえた上でマルクス思想

の全体像を明らかにしているものが他にないことによる。本来なら最新文献が出版されたことで必要になる、これまで解説されてきたマルクス思想の全面的な見直しや論争・個々の重要な論点の点検が全く成されていない。その意味において本書は実に貴重な本のである。

本書は、経済学者でも革命家でもなく、社会思想家としてマルクスを取り上げている。著者の佐々木隆治氏は、1974年生まれで一橋大学社会学研究科博士課程修了後、立教大学経済学部准教授になり、現在は日本MEGA（新マルクス・エンゲルス全集）の編集委員会の編集委員として



て『資本論』草稿や抜粋ノート研究に精力的に取り組んでいる。主な著書には『マルクスの構想』第2章 資本主義の見方を

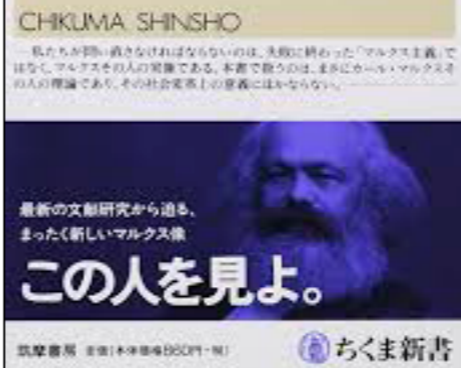
変える（1848〜1867）―マルクスの経済学批判 第3章 資本主義とどう闘うか（1867〜1883）―晩期マルクスの物質代謝の思想

読書室

佐々木隆治

カール・マルクス

資本主義と闘った社会思想家



て『資本論』草稿や抜粋ノート研究に精力的に取り組んでいる。主な著書には『マルクスの構想』第2章 資本主義の見方を

変える（1848〜1867）―マルクスの経済学批判 第3章 資本主義とどう闘うか（1867〜1883）―晩期マルクスの物質代謝の思想

産様式を変革するには、商品や貨幣等に物象化される私的労働をアソシエイトした自由な労働者たちの共同労働に変革し、生産手段から分離された賃労働を生産手段と生産者との本源的な統一の下へと変革してゆかなければならぬのである。

マルクスの思想はまさにこれなのだ。ここで唐突ながら我々ワーカーズの綱領的な立場を紹介するのをお許し頂たい。このマルクスの思想はまさに我々の政治的な立場である。

2010年3月に我々は社会評論社から『アソシエーション革命宣言―協同社会の理論と展望―』<http://workers-net.net/asosibook.pdf>を出版している。このマルクスの思想に関心がある方たちには、この機会に本書と合わせて是非ご検討をお願いしたいと考える。

晩期のマルクスはこのアソシエーション社会の二段階論を『ゴータ綱領批判』で展開したが、何らかの報酬がなくとも人々が自由に労働し生産物を各自の必要に応じて入手する社会がマルクスの未来社会論であった。そしてその核心こそ「物質代謝」の概念で

ある。この「物質代謝」の概念は、実に『資本論』の全編を貫く基本視角といっても過言でない。マルクスが労働を考える際の大前提は、人間が自然の一部であるとの事実から出発する。『資本論』では「労働はさしあたり人間と自然の間の一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によつて媒介し、規制し、制御する一過程」と定義した。つまり人間の生活とは、自然との物質代謝を通じて成り立っているものなのである。

この人間にとつての根本的な物質代謝が資本によつて攪乱されているとの認識が、マルクスの判断であった。この物質代謝を基本とするマルクスの視点は、『資本論』第1巻において社会変革の究極の根拠としてきわめて明確に、以下のように記述されている。「資本主義的生産様式は「人間と自然との物質代謝の破壊、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神正確の破壊」と同時にこの物質代謝の単に自然発生的な状態を破壊することを通じて、その物質代謝を社会的生産の規制法則として、また十分な人間の発展に適合した形態において、体系的に

再建することを強制する」物質代謝の復権が強制される！つまりマルクスが資本主義的生産関係が生産力の発展にとつての桎梏となるといつたのは、価値増殖を最優先する生産関係の下では人間と自然との持続可能な物質代謝を可能にする生産力を実現することが出来ないということだった。だからこそこの社会は変革されなければならないし、そうでないなら人間も自然も破壊されてしまい生きていくことは出来ない。これがマルクスの言説の真意だったのである。何と現代的な認識であることか！

マルクスにこの着眼を示唆したのは、農芸科学者のリービッヒである。『資本論』第1巻で、マルクスは「自然科学の見地からする近代的農業の消極的側面の展開は、リービッヒの不滅の功績の一つである」と顕彰した。この意味を正しく読み取れた人は少ない。

大量の化学肥料の投入による土地の疲弊化、酸性雨の降る土地の増大等、さらに遺伝子組み換えトウモロコシの出現や牛・豚の餌に抗生物質を混ぜて与えるなど、人間的で合理的な物質代謝とはいえない

い。まさに合理的かつ人間的な物質代謝の再建が必要である！

では「物質代謝を社会的生産の規制法則として、また十分な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建すること」はいかにして可能なのだろうか。これが問題である。

ここで『資本論』第3部草稿第1稿を引用する。ほとんどの人は読んだ事がないものだ。

「この領域『物質的生産―直木』における自由はただ社会化した人間、アソシエイトした人間たちが盲目的な力としての、自分たちと自然との物質的代謝によつて制御されるのをやめて、この物質的代謝を合理的に規制し、自分たちの協同的な制御の下にいくということ、つまり力の最小の消費によつて自分たちの人間性に最も相応しく、最も適合した諸条件の下でこの物質代謝を行うということである」要は人間性に相応しいが核心だ！

このように人間的で合理的な生産力が実現されれば、一日の労働時間は著しく短縮され、物質代謝の必要から独立した「真の自由」が実現され

述されている。著者は久留間鯨造氏を学統とする大谷楨之介氏の理論的影響下にあり、私たちに好感を感じさせ、その記述を信頼させるものとしている。

第2章については読者には非とも真剣な精読を期待したいものである。

既に述べたが第3章が本書の核心部分である。1867年4月、『資本論』第1巻を脱稿したマルクスの社会変革の展望は、それ以前と比較してはるかに具体的で現実的なものになっていた。それは第1章に記述した「恐慌革命論」から、労働時間規制のための闘争等の改良闘争を重視し、それ以前は否定的であった協同組合運動を高く評価するようになった事に象徴される。マルクスの転換としてこの点は多くの人から既に注目されている。

こうしたアソシエーションの形成に注目して、マルクスは社会変革は単に政治権力を掌握する政治革命だけでなくアソシエイトした労働者が自分自身で社会を運営しなければならぬとした。アソシエーション社会とは生産手段を国有化して計画経済を実施する社会ではない。つまり生

る。マルクスの未来社会とは、物質代謝を合理的かつ人間的に制御し、そのことにより「真の自由」が実現する社会である。そしてアソシエーション社会こそは、資本主義生産様式下での正しくは労働環境病とも呼ぶべき「生活習慣病」やストレス等で発病する「精神病」が大幅に減る社会である。

晩期のマルクスはこのような物質的代謝の基本視角から、農芸科学や地質学、そして共同体研究などの広範な領域において、この物質的代謝の論理を一層詳細に研究し、そこにどのような抵抗の可能性があるのかを精力的に探求し続けた。そして最新文献には、これまで知られざるマルクスの実像が示されているのである。まさにマルクスは生きて

いる！

自らの勉強のために「抜粋ノート」を作る習慣があったマルクスは、その死後膨大なノートを残した。これについては、旧MEGAを編集したソビエトのリャザーノフです

ら「どうしてマルクスはこのような体系的で、徹底した要約のために、これほど多くの時間を無駄にし、一八八一年という晩年に地質学について

のグローバルイズムには肯定的な評価をしていた。故にイギリスによるインド社会の破壊もその非人道的性格を厳しく指摘しながらも、基本的には社会を前進させるものだとの肯定的な捉え方をしていたのである。

G・マウラーを研究することでマルクスは、非西洋社会の共同体の生命力、植民地主義に対するそれらの抵抗力に注目することになり、三種類のザスリーチへの手紙を書くことが出来た。実際に出した手紙から確認できることは、①単線主義的で、近代主義的な歴史観を明確に否定した②共同体の必然的な解体を否定する根拠として前近代的共同体の生命力を挙げた③ロシア農業共同体を「ロシアにおける社会再生の拠点」として位置づけたことである。世界どこでも生産様式が単線的に発達するなどとは、マルクス説ではない！

すなわちマルクスは、資本主義的生産様式が生産力とは異なる、各国における持続可能な物質的代謝とその制御による合理的な生産力の発展の道を模索していたのである。周知のようにマルクスは、主要著作では体系的なジェン

この動きは、幕末の農民一揆や「おかげ参り」また維新後の「秩父困民党」とも似ていますし、教祖の崔済愚が没落両班であつた点などは、「西南戦争」など下級士族と農民の反乱にも通ずるようです。東学農民軍は、各地方の官公署を占拠していきます。

李朝政府はこれを弾圧するため、清朝に鎮圧軍の派遣を依頼します。すると、これを口実に日本も軍隊を派遣してきます。

清朝と日本の双方からの軍事侵攻を避けるため、李朝政府と東学農民軍は「和約」をむすび、各地方に「執綱所」という自治政府が樹立され、「身分差別の廃止」や「土地の均等な耕作」など農民主体の改革をめざします。

しかし、この動乱に乗じて日本は東学農民軍を軍事的に弾圧し続け、清朝に対して「日本と中国が共同して朝鮮の改革を進めよう」と一方的な提案をし、拒否されると日本軍は清軍を攻撃し、日清戦争に発展します。

こうして「東学農民蜂起」による「下からの改革」は、最初は李朝軍の弾圧、次いで清朝軍の派遣、そして日本軍の介入によって、潰されてし

ダーに対する記述はしていない。晩期マルクスもまとまった著作こそ残さなかったものの、「抜粋ノート」には男女差別を私的所有の有無に解消したエンゲルスとは異なり、私的所有とは独立した問題と把握していたのである。勿論、

『日韓でいっしょに読みたい韓国史』 徐穀植・他(明石書店刊)

●今までになかった本

この本の意義について、翻訳者の君島和彦氏は次のように述べています。

「この本を多くの人に読んで欲しいと思います。」

「韓国人は、最初から日本の高校生や研究者が、日本人に読んでもら

何でも紹介



この本は日本の教科書にはない特徴的な構成が見られます。その一つは「韓国の歴史」と「両国の交流」の二部構成となっていることです。

その本格的で全面的な説明はなされてはいないのだが…。紙面が尽きてきたのでここで結論を書く。死ぬまで時間を惜しみながら社会変革を追求したマルクスが残した抜粋メモを生かすも殺すも、まさに今生きる私たち自身の問

●特徴的な構成

一般の市民の方々に読んでもらうことを目的に書かれたのです。今までになかった本です。」

●上からの改革(甲申政変)

まず、西洋船(フランス・アメリカ)の侵入を撃退した大院君政権を支えたのが「衛生斥邪論」派であったことは、幕末の「尊皇攘夷」派とも共通します。

やがて高宗政権のもとで、朴珪寿などの「開化思想」が台頭しますが、この機会を利用して、明治政府は「江華島事件」を起こし、釜山など三港を開港させます。これは、

●下からの改革(東学農民運動)

一方、李朝末期の両班支配の腐敗に抵抗して、「東学」という平等主義的を唱える宗教が民衆の心をつかみ、やがて農民蜂起と合流していきま

まいますが、その精神はその後の「義兵闘争」などに引き継がれます。

●外圧と大韓帝国の改革

日清戦争が日本有利に進む中で、金弘集の「親日政府」ができて「甲午改革」を進め、中央と地方の行政・司法・教育などの改革を進めます。

さらに「太陽暦」「種痘」「小學校設置」「軍制改革」を進めますが、「断髮令」の強制は民衆の大きな反発を招きます。

日清戦争の結果、清朝の宗属支配は後退しますが、「遼東半島の割譲」に危機を募らせた帝政ロシアがフランス・ドイツと共に「三国干渉」で遼東半島を返還させ、日本が劣勢になると「親露派」が台頭します。

これに焦った日本の三浦吾楼公使等は、親露派の中心であった「明成(ミヨンソン)皇后」を殺害するという蛮行におよびます。このことが国際的非難を浴び、日本の介入は一時後退し、代わってロシアが森林伐採権など權益拡張に乗り出します。

こうした外圧の均衡局面で

その本格的で全面的な説明はなされてはいないのだが…。

この問題を他人事ではなく自身に深く関わる現実的で現代的な問題として真剣に考えるよう、私は強く望むものである。

読者もまた本書を一読し、この問題を他人事ではなく自身に深く関わる現実的で現代的な問題として真剣に考えるよう、私は強く望むものである。

大韓帝国・朝鮮総督府を経て南北分断と民主化までの近現代。「交流」では櫛目文土器から渡来人・倭寇・秀吉侵略・朝鮮通信使・開国後の文化流入を経て最近の韓流ブームまで、それぞれ叙述されます。

もう一つの特徴として特に「近代前半」について、「朝鮮政府側の改革」と「民衆側からの改革」および「内政干渉による改革」という三つの角度から複合的に改革を叙述しています。

今回は、この「近代前半」つまり開国から植民地支配の手前までの「改革」の各側面について、明治維新史とも対比しながら紹介します。

●上からの改革(甲申政変)

まず、西洋船(フランス・アメリカ)の侵入を撃退した大院君政権を支えたのが「衛生斥邪論」派であったことは、幕末の「尊皇攘夷」派とも共通します。

やがて高宗政権のもとで、朴珪寿などの「開化思想」が台頭しますが、この機会を利用して、明治政府は「江華島事件」を起こし、釜山など三港を開港させます。これは、

緑化に従事した浅川巧。革命家朴烈夫人の金子文子。光州学生運動を弁護した布施辰治。孤児院を運営した田内千鶴子。そして「偏見から抜け出し韓国史を研究した日本人」として、特に「梶村秀樹」を次のように紹介しています。

「彼は、日本の韓国支配に対する反省と批判の上で、韓国の歴史を新しい視点で研究した。それ以前の韓国史研究は、韓国の後進性と他律性を強調してきた。彼はこのような視角から脱し、韓国の歴史も韓国人により自立的に発展

してきたことを論証し、多くの論著を発表した。」「韓国の民主化運動を支援する一方、在日韓国人の地位を向上させるために一生懸命努力した。」「彼が残した韓国史研究と日韓連帯の種は、今も良識的な日本人の心の中に育っている。」

日本の教科書からは十分に伝わらない、韓国・朝鮮の「主体的」「自立的」な歴史を学ぶための良書として、ぜひ読んでいただきたいと思えます。(松本誠也)

韓国釜山の博物館めぐり

●高速船で釜山をめさす

秋の連休の良く晴れた朝、僕は博多国際ターミナルから、高速船「ビートル」に乗って、一路韓国・釜山をめざした。

玄界灘を約三時間。途中、杳岐・対馬の島影が見えた。太古の倭人達も、この島影を頼りに、九州北部(筑紫)と半島南部(伽耶)の間を、豪快に行き来したのだろうな、などと思いをめぐらしているうち、船は釜山港に着いた。

●日韓交流の玄関口

釜山は朝鮮半島最南端の港町で、古来より日本(倭国)との交流の玄関口として発展してきた。白村江の戦で、倭国の百濟救援軍は、釜山から

韓半島に上陸した。元寇では、モンゴル帝国に動員された高麗水軍が、釜山から博多へ向かった。秀吉の朝鮮侵略軍は呼子・松浦から釜山に上陸し半島を蹂躪した。その一方、平和的な交流拠点としての顔もある。中世には倭館が設置され、高麗青磁等が博多商人を通じて日本にもたらされた。朝鮮通信使も、釜山から対馬・杳岐を経て、江戸幕府まで往還し、沿道の住民から大歓迎された。

明治政府が江華島条約により三港を開港させると、釜山に日本人町を設け、日本商人が活動するようになった。ここから「日帝の朝鮮侵入」が始まる。やがて釜山から満洲まで、朝鮮を縦断する軍事目的の鉄道が敷設された。

●東洋拓殖会社の建物

港からホテルに荷物を預け、南浦洞(ナンポドン)のお店で「ミルミョン」という釜山名物の麺類の屋敷を済ませると、いよいよ歴史館をめざして、ガイドブックと街路の掲示板を見比べながら歩き始めた。「国際市場(クッチェンジャン)」「富平市場(プピョンシジャン)」、何となく大阪の「黒門市場」を思わせる広大な市場街を、迷いながら歩き続け、やっとめざす歴史館に辿り着いた。

この建物は、もともと日本の国策会社「東洋拓殖会社(東拓)」の釜山支店だった。独立後、アメリカ文化院として使われていたが、市民の要望で一九九九年、釜山市に返還され「外国勢力の駐屯の象徴だった建物を、激動の近代史を知らせて教育できる空間として活用するため、2003



釜山近代歴史館 東洋拓殖釜山支店として建てられた建物は現在釜山市の近代歴史館になっています。この博物館は日本統治時代から朝鮮戦争終了までの近代史資料が展示してあります。

年に釜山近代歴史館として会館した(同館パンフレットより)。

●経済侵入の起点

館内には、釜山における日本の経済浸出に関する経過が様々な写真、パネル、ビデオで展示されていた。以下、パンフレットから引用する。

「1876年開港後、日本人は朝鮮の米を日本に持っていき、日本の工業製品を朝鮮市場に売るために釜山に渡ってきた。朝鮮末期に造成された草梁倭館が治外法権領域である専管居留地として解放され、日本人は朝鮮政府の干渉を受けずに自由に貿易ができた。」

「日帝は釜山を大陸侵略のための踏み台とするために、海岸を埋め立てて市街地を拡大して港湾を造成した。埋立地には道路、港湾、倉庫など近代施設を設けた。」

「東洋拓殖会社は1908年日本が朝鮮を経済的に支配するために設立した国策会社である。この会社は朝鮮の米を安定的に供給して日本国内の没落した農民を救済することを目標としており、そのため



釜山近代歴史館の玄関

「日帝は釜山を行政的に支配するために釜山府庁を設け、その下に最小行政単位まで支配力を拡大した。特に朝鮮侵略の重要な目的である米収奪のために洛東江に堤防を築いて金海平野を造成し、朝鮮の小作農を収奪した。」

完全！

「日帝は釜山を行政的に支配するために釜山府庁を設け、その下に最小行政単位まで支配力を拡大した。特に朝鮮侵略の重要な目的である米収奪のために洛東江に堤防を築いて金海平野を造成し、朝鮮の小作農を収奪した。」

「日帝は釜山を大陸侵略のための踏み台とするために、海岸を埋め立てて市街地を拡大して港湾を造成した。埋立地には道路、港湾、倉庫など近代施設を設けた。」

「東洋拓殖会社は1908年日本が朝鮮を経済的に支配するために設立した国策会社である。この会社は朝鮮の米を安定的に供給して日本国内の没落した農民を救済することを目標としており、そのため

「日帝は釜山を大陸侵略のための踏み台とするために、海岸を埋め立てて市街地を拡大して港湾を造成した。埋立地には道路、港湾、倉庫など近代施設を設けた。」

「東洋拓殖会社は1908年日本が朝鮮を経済的に支配するために設立した国策会社である。この会社は朝鮮の米を安定的に供給して日本国内の没落した農民を救済することを目標としており、そのため

●フレンドリーな市民

夕方、地下鉄で西面(ソミョン)の中心街へ。歩き回った末、屋台で「トッポギ」注文した。これが予想をはるかに上回る「激辛」！汗を拭きふき頑張って食べていたら、

「日帝は釜山を大陸侵略のための踏み台とするために、海岸を埋め立てて市街地を拡大して港湾を造成した。埋立地には道路、港湾、倉庫など近代施設を設けた。」

屋台のおばさんが心配して「べール？」(ビール飲みますか?)と勧められた。おかげで冷たいビールで舌を冷やしながら、何とか



釜山博物館

●慶州と釜山の博物館で

二日目は、ガイドさんの案内で慶州(キョンジュ)日帰りツアー。

「石窟庵(ソックラム)」「仏国寺(ブルグクサ)」「慶州博物館」など新羅の文化遺産を見学した。黄金の王冠や流線型の石仏の印象は一言で表せば「優雅さ」であり、百済の「素朴さ」、高句麗の「勇壮さ」と対照的である。倭国が新羅の「強さ」に反発しつつも、その「清新さ」に憧れた心境が何となくわかる。三日目は、地下鉄を乗り継いで「釜山博物館」へ。

本土と沖縄のかけ橋をめざして

エイジの沖縄通信

N066

「横浜米軍機墜落事故から42年」

東京新聞のコラム「編集局／南端日誌」(9月5日付)を読み、横浜での米軍機墜落事故の事を思い出しました。

このコラムを書いた記者は「小学3年の運動会の日。弁当を食べ終えて教室の窓から何げなく外を見ていた時だった。飛行機が黒煙を噴きながら急降下し、直後に大きな煙

が上がった」と書き始めている。私もこの墜落事故の記憶はあるが、もうかなり昔のことなのでほとんど忘れかけていた。

今から42年前の1977年9月27日午後1時すぎ、厚木基地を飛び立った米軍のFアントム偵察機が横浜市緑区荏田町(現在の青葉区荏田北)に墜落した。

その日、戦術偵察機Fアントム機は、厚木から千葉県館山町の東南沖に待機する空母ミッドウェイを目指し離陸した。離陸後すぐエンジンから出火し、2名の乗員はパラシュートで即時脱出。ジェット燃料を満載した無人の機体は緑区の上空に



横浜での米軍機墜落事故

取り残され、火を吹き轟音を立てて墜落した。離陸からわずか3分後のことだった。墜落現場は閑静な住宅街。まだ土だつたここに墜落の衝撃で4メートルの穴が開いたという。炎は一瞬で6軒の家を焼き尽くし9名が負傷。中でも、墜落の衝撃で分解したエンジンの直撃を受けた土志田和枝さん(当時27歳)と、ご主人の妹さん(26歳)は、衣服が焼け落ちた姿で2人の子どもを抱え、黒煙の中から飛び出したという。しかし、3歳と1歳の幼い兄弟は大やけどで死亡し、母親の土志田さんも4年4カ月の治療もむなしく亡くなられた。

米軍機の墜落事故



オスプレイの墜落事故

今回行けなかつた「朝鮮通信使歴史館」や、「国立金海(キメ)博物館」(伽耶の歴史)等は、心残りだが、次回のお楽しみとしよう。帰国して職



慶州・新羅時代の仏国寺で

●民主革命世代の人権意識

「六月革命」の記録映像は、催涙弾の中をデモ隊が進軍するさまじい闘いで、何人かの学生が命を落としたものだ。胸を突く映像を前に、僕は涙をこらえつつ、立ち尽くした。

「日本人に風当たりが強くなかつた?」とよく聞かれるが、どう説明したらいいのか、一九八七年の民主化革命の流れが続く中で、韓国の若い人々は、人権意識が日本以上に進んでいるように感じる。日本の安倍政権に対する批判はしつかり主張する一方で、行き過ぎたナショナリズムに対しても、きちんと諫めるセンスが定着しているとも感じる。

(松本誠也)

生き残った子どもたちには長くトラウマ（心的外傷）が残った。「思い出したくない」「そっとしてほしい」と、事故について語るのを避けていたと言う。口を閉ざしていた遺族が「忘れたくない」「忘れてほしくない」という気持ちを抱くようになったのは、被害関係者がNPO法人「石川・宮森630会」を結成し、資料館の設置や証言集の発行など、積極的に記憶の継承に取り組んできたからだと言う。

横浜でも悲劇を繰り返さないためにと、事故の実態を伝え続けている人がいる。

齊藤真弘さんは「自分の子どもと犠牲になった2人の年齢が近く、人ごととは思えなかった」「こんなことがあっていいのか。二度と起こしてはいけない」との思いから活動を始めたと言う。

1986年に「横浜米軍機墜落事故平和資料センター」を設立。志を同じくする人が持ち寄った新聞記事や現場の写真などを自宅で整理して希望者は閲覧できるようにしていると言う。私も一度、訪問したいと思っている。

今の日本の現実、この頃と同じように米軍機は日本中の空を好き勝手に飛び回って

訓練をしている。特に欠陥機「オスプレイ」は、沖縄・本土各地で事故や落下物を起こし大問題になっている。オスプレイの忘れられない事故が、沖縄県名護市の浅瀬で

9月7日（土）、東京荒川の河川敷で行われた「関東大震災96周年／韓国・朝鮮人犠牲者追悼式」に初めて参加した。

残暑の厳しい午後でも、木根川橋鉄道高架下の日陰には心地よい風が吹き抜ける。ここは虐殺事件のあった場所だ。この日の参加者約380人が、用意された椅子に座り、始めに李政美さんの追悼の歌に耳を傾ける。その後あいさつに立った80代の在日二世の男性もまた、胸を打つ『よいとまけの歌』を披露、そして最後に「過去に向き合わなければ、また同じ過ちを繰り返す。」との言葉を繰り返す。」との言葉

関東大震災時の虐殺を悼み記憶する

色鉛筆

大破したオスプレイ事故である。大破した機体の写真を掲載しながら、多くの日本の新聞は第一報に「オスプレイ不時着」や「着水」の見出しであった。「墜落」と報じたのは

葉で締めくくった。式の終わりは、太鼓や鉦をならしての踊り「追悼のムンブル」。テンポ良いリズムに、誰もが踊り出す。多勢の輪の中で、真っ白なチマ・チョゴリの女性のおでやかな舞がひときわ目を引いた。

一般社団法人「ほうせんか」の主催するこの催しは、虐殺された人々の遺骨を捜す目的で、1983年9月に河川敷の「試掘」を行ったことから始まり、「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会」を発足。以後、調査、聞き取り、追悼などに取り組む。

2009年には荒川の土手下に土地を取得し、追悼碑も建立した。当初は虐殺現場だった河川敷への建立をめざしたものの国土交通省の許可が下りず、碑は土手下の民家の間に建ち、隣に「ほうせんかの家」を設け、展示を行ったり語り合う場となり、近隣とも良い関係を保っている。

この日「悼」と刻まれた



は地元「琉球新報」だけだったと思う。国民の命と財産を守る日本政府の責任は思い。多くの関係者がすぐ取り組むべき課題は「日米地位協定の改訂」（下に

この会場で手に入れた、ちくま文庫『証言集・関東大震災の直後・朝鮮人と日本人』（西崎雅夫編／筑摩書房）では、子どもの作文・庶民・文化人・公的資料等、約180編が生々しい虐殺の実態や当時の様子を伝えている。

1923年9月1日、突然の大地震と共に、昼食時の火が折からの強風にあおられ、瞬く間に広がり大火災となった。余震

「あまりに残酷な殺害方法で筆に記すのも嫌だ」との一文や、さらにその死体を、子ども連れのお婆が「この悪い朝鮮人めが！」と痛めつける場面もある。読み進むうちにあまりの酷さに、私は何度も本を伏せてしまった。

最も忘れたいのは、当時の日本政府

イツ・イタリア並みに）であると指摘しているが、政府の対応はまったく鈍い。最後に、横浜の米軍機墜落事故について詳しく知りたい方には、『米軍機墜落事故』（河

府は実態調査を行わず、それほどか事件の隠蔽を図ったことだ。さらには朝鮮人自身による調査をも妨害した事だ。わずかに内閣府の中央防災会議の報告書から「震災による死者数、10万5385人の1、数%」の記述から、犠牲者は千々数千人と推測されるのみ。今もなお遺骨の行方すら分らない。

毎年追悼式に、2000年以降の歴代東京都知事が送ってきた追悼文を、小池知事は3年前から送っていない。ヘイトスピーチが蔓延し、嫌韓報道があふれる今の日本は「また同じ過ちを繰り返す」かもしれない危機的状況にある。こうした現状から『危機感から追悼行事を守ろう、忘れまい』という機運が広がる。皮肉なことです。』とほうせんかの愼民子氏は語る。政府として一刻も早く、事実の調査、検証そして謝罪に取り組むべきだと思

（澄）